

大槌町社会福祉協議会事務所移転

多くの助けに支えられた仮設事務所での業務と、新しい事務所でスタートした今

平成23年3月11日、東日本大震災津波の発生により、多くの命や建物、財産等が失われました。大槌町社会福祉協議会は、社協事務所が流失し、約10年仮設事務所で業務を行ってきましたが、令和4

年4月に念願の新事務所へ新築移転しました。これまでの経緯と今後の抱負について、徳田信也会長と中村一弘事務局長からお話をお聞きしました。



大槌町社協事務所外観

土地さえ決まれば何とかなる

―事務所を移転するまでの経緯をお聞かせください。

【徳田会長】 震災直後は、一切何もなく、社協の事務所そのものがなかったわけです。当時は、事業所の災害復旧のことしか頭になくて、社協本来の仕事はなかなかできませんでした。事務所を再建したいと思っても、土地も、町も、何も復旧していないので、しばらく再建には手を付けられませんでした。5年くらいたってからですね。仮設事務所はリース物件だったのでいずれは返却しなければなりません。いつまでも仮設事務所のままではいけないので、まず用地を考えました。土地さえ決まれば何とかなる。最初は、仮設事務所があった土地に建てようかとも考えましたが、いろいろ考えて、現在の土地に建てると決めたのは令和3年度に入ってからでした。

【中村事務局長】 土地は町の所有でした

ので、令和3年6月頃から交渉に入り、賃貸契約を結んだのが8月です。理事会と評議員会で計画の承認を得て、業者選定をして…と、1年以内に進めていくことになったため、すべてがバタバタしていました。計画通りに進んだことは運がよかったと思いますが、事務所の建設については、補助も何もなく、すべて自費です。資金繰りの方が大変でした。

とにかくやるしかなかった

―仮設事務所で難しいと感じたことや、つらかったことはありませんか？

【徳田会長】 難しいとか、つらいとは思って、町民みんなでしたから。震災で当時の会長、事務局長、職員も亡くなって、3日後に社協職員が私を迎えに来ました。当時、私は社協の副会長で、指揮を執る人が他に誰もいなかったからでした。そうしなると社協も動きようがなかったんです。



徳田信也会長

介護サービスの利用者もいましたが、帰るところがないわけです。家もないし、家族も連絡が取れなかったり亡くなったりしている。それで、デイサービスで預かり、私や職員もそこに泊まりました。ボランティアセンターの運営をはじめ、全国からの応援に助けられました。様々なボランティアも助けに来てくれました。ありがたいことだらけです。

―社協職員は、疲れも相当たまっていたのではないですか？

【中村事務局長】 社協だけではなく、被災地全体に言えることですが、メンタル面でつぶれる職員もいました。被災直後は、家族がどこにいるかわからない、考え余地もない、仕事で泊まらなければならぬ、とにかくやるしかない、そんな状況が続きましたから。表面には出てきませんが、仕事はしたいけど、気持ちと行動がつかない、忙しくなるほど、どうしたら良いかわからなくてだんだん沈



中村一弘事務局長

んでいく。体力があっても、心の方が続かなくなっていく。身体のケガは治るけれども、心のケガは今でもなかなか消えないです。

—新しい事務所へ移転していかがですか？

【徳田会長】やはり、「我が家」というか本設の事務所というのは、職員の気持ちも落ち着くと思います。生活支援相談員も少なくなりましたが、同じ場所で業務ができることは良いですね。

【中村事務局長】仮設事務所は、1階と2階に職員が分かれていたので、職員同士、若干の不便さを感じていたところがあったんですね。新しい事務所は、平屋建てでワンフロアなので、お互いに情報を共有で



事務所内の様子

きるようになって、以前よりも業務を進めやすくなったところはありますね。

大槌町の地域福祉の拠点として

—今後の抱負をお聞かせください。

【徳田会長】小さい事務所だけれど、ここを起点として地域福祉の中心になっていけたら良いと思います。これからですね。

【中村事務局長】福祉は、地域住民の問題が様々あるので、広く目を届かせる必要があると思います。行政的に大変なことがあれば、我々に相談してもらったり、行政ができないことであって我々が対応できるのであれば手伝っていききたい、協働していきたいと思っています。

大槌町社協概要

- 名称：社会福祉法人大槌町社会福祉協議会
- 住所：大槌町大町9-50
- 法人職員数：59名
- 介護保険事業所
介護サービスステーション
(居宅介護事業所・訪問介護事業所・訪問入浴介護事業所)
大槌町デイサービスセンターはまぎく
小規模多機能型居宅介護事業所 ほっとおおつち
小規模多機能型居宅介護事業所 ハイスこづち
- 障がい福祉サービス事業所
就労継続支援事業所(B型) ワークフォローおおつち

令和4年度岩手県保育研究大会

すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ 社会の実現をめざして

令和4年度岩手県保育研究大会が6月7日、9日、10日の3日間、Web配信形式で開催され、県内の保育施設職員23名が各研究テーマに沿って発表を行いました。

この大会は、保育・子育ての制度動向や社会福祉法人に求められる責務への理解を深め、保育の取組みを充実させるとともに、養護と教育の実践のもと、これまで培ってきた保育の営みの深さを広く社会にアピールすることを通して、子どもにとって最善の利益となる保育を提供していくため、保育の役割と実践について研究することを目的に開催されました。発表者の取組みについて、一部ご紹介いたします。

子どもの主体性を育む保育を探る

大上 愛莉さん(葛巻保育園分園江刈保育園保育士)

7月、園児は、スイカから2種類の葉が出ていることに気づき、図鑑で調べても1種類しか載っておらず、謎は深まるばかり



り。「水をたくさん吸った葉は丸い形になる」「他の野菜も大きくなれば違う形の葉が出てくる」など予想し、この疑問を宿題として持ち帰って家族と取り組むことになりました。家族は園での子どもたちの様子に興味を持ち、楽しみながら「かぼちゃの苗に接木?」「何らかのウリ科の植物へ接木?」など一緒に答えを探るものの、子どもたちにとって「接木」はイメージしにくい様子。そこで、畑に詳しいおばあちゃんを招待し、接木を教えてもらいます。